

「揺れにくく、風水害に遭いにくい場所に住み、強い建物を建てて、室内を安全にする。」
しかし、日本に住む限り、地震や台風などによる被害を避けることはできません。災害発生の際にどうなるかをイメージする方法の一つとして、土地の成り立ちや、昔の地図などからその土地の過去の様相をできるだけ正確に知ることで、災害被害を正しくイメージすることにつながります。名古屋市全体の土地の成り立ちから、災害リスクについて考えてみましょう。

●名古屋の土地の成り立ち

名古屋の地形は、西部の沖積層、中央部の台地、東部の丘陵地の3つに大別されます。650万年前から100万年前の名古屋は、東海湖という湖沼や低湿地の中にありました。その後地球の温暖化や寒冷化の影響により海面上昇（海進）や下降（海退）により北部・西部に段丘崖を持つ台地が形成されました。

縄文時代以降の海岸線の推移に着目すると、縄文時代中期（約6千年前）では、名古屋の中央部の台地より西側は大垣付近まで海でした。

その後、河川の土砂堆積などにより海岸線は徐々に南下し、古代から中世（5世紀から7世紀頃）では、現在の中川区まで陸地となりました。その後、新田開発により現在の港区や南区で干拓が進み、海拔の低い土地が形成されています。

さらに明治時代以降には、輸出産業の基盤となる名古屋港を整備するため埋め立てが行われ、現在の海岸線まで開発が進みました。

このように、自然の営みと人工的な土地の改変により、現在の名古屋市が形成されています。

⑥名古屋郵便 電信局の崩落

建物全壊率と道路閉塞率
→ P.27 ~ 30

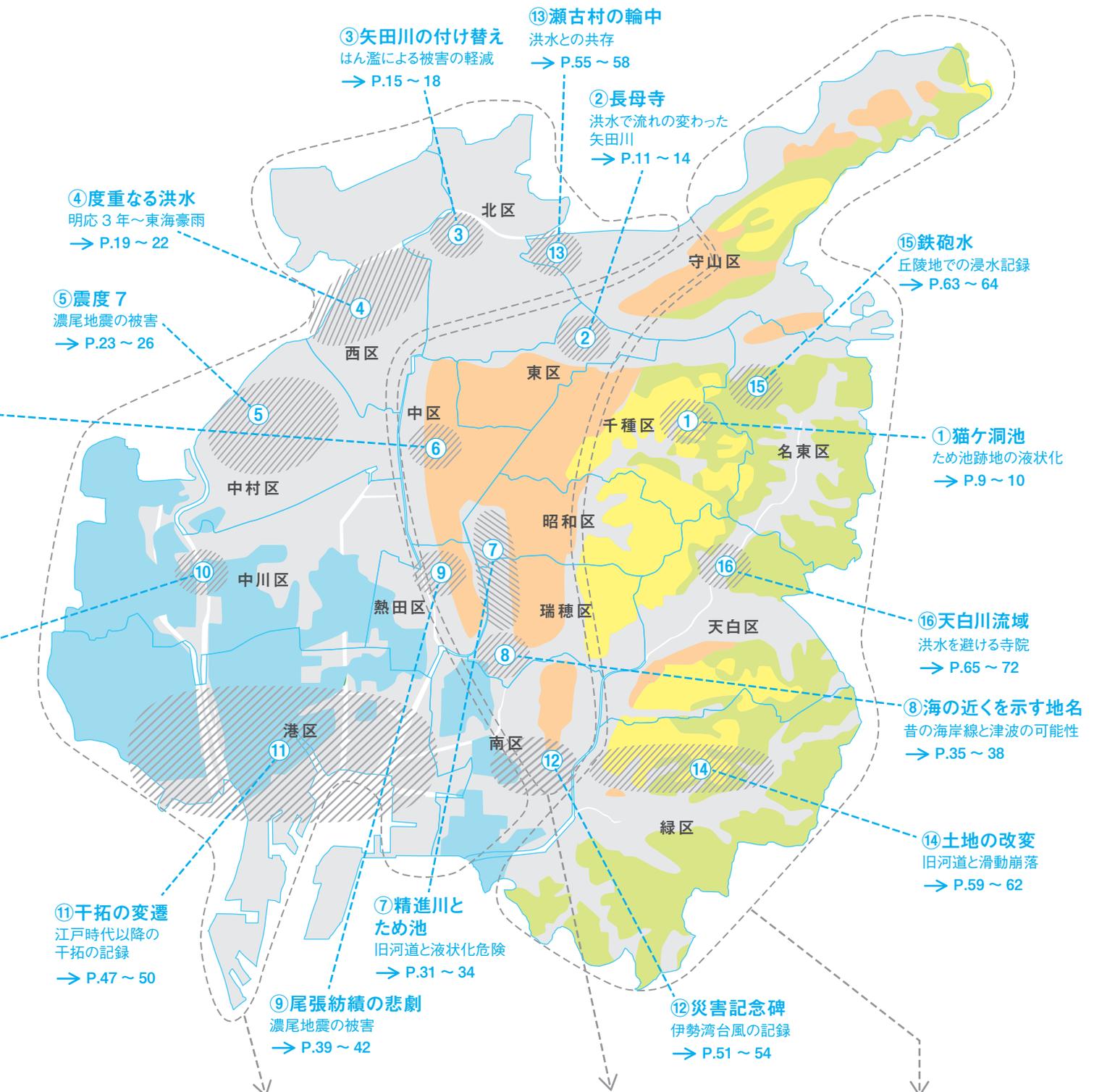
⑩歪んだ万場大橋

濃尾地震の被害
→ P.43 ~ 46

●土地の成り立ちと災害リスクとの関係について

地盤の軟弱な沖積平野では、地震発生時の揺れの増幅や長周期地震動により高層ビルは大きく長く揺れることがあったり、液状化の危険度が高くなります。また中央部の台地では、急速な都市化に伴い、大雨が降った際の内水はん濫や谷底平野の埋め立てによる液状化も想定されます。

東部丘陵地では、宅地化を進めた際のため池などの埋め立てや丘陵地を平坦化するための盛土などによる軟弱な地盤が潜在していたり、丘陵地のため地震や大雨などによる土砂崩れや滑動崩落などの可能性も考えられます。



	西部(沖積平野)	中央部(台地)	東部(丘陵地)
土地の成り立ち	<ul style="list-style-type: none"> ● 東海湖・海 ● 河川土砂堆積による平野形成 ● 新田開発(干拓) ● 都市開発(埋め立て) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 集落の形成 ● 西側は市街地 ● 東側は畑 ● 谷底平野は水田 	<ul style="list-style-type: none"> ● 里山(農地、ため池、雑木林) ● ため池灌漑(田・畑) ● 林端への集落形成 ● 切土・盛土(宅地化)
地形的特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 湿地、干潟(土質軟弱、水はけ不良) ● 自然堤防(河川はん濫等による形成) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 微高低差 ● 熱田層(上部砂層、下部泥層) ※地下水、井戸、湧水 	<ul style="list-style-type: none"> ● 標高差大(起伏) ● 砂礫層(湧出湿地) ● 粘土層(陶器生産)
災害リスク	<ul style="list-style-type: none"> ● 液状化 ● 津波浸水 ● 河川洪水 ● 長期湛水 	<ul style="list-style-type: none"> ● 内水はん濫 ● 液状化 	<ul style="list-style-type: none"> ● 内水はん濫 ● 土砂災害 ● 液状化 ● 滑動崩落